

1 3. 管内A市で発生した豚の流行性脳炎

大分家畜保健衛生所

○（病鑑）山田美那子・長谷部 恵理・丸山 信明

〔はじめに〕豚流行性脳炎はコガタアカイエカによって媒介される法定伝染病であり人獣共通感染症である。ワクチン接種によりその発生は少なくなってきたが、散発的に報告されている。今回、管内A市の2養豚場で異常産が発生し、豚の流行性脳炎と診断されたのでその概要を報告する。

〔発生概要〕A農場は母豚100頭規模の一貫生産農場で、平成28年5月の抗体検査立入の際、毎月異常産が散発しているとの通報があり、7月6日発生の初産1腹の死産胎子1頭について病性鑑定を実施。B農場は母豚250頭規模の一貫生産農場で、9月に入り初産での虚弱豚を含む黒子、白子等の異常産が急増したとの連絡があり、初産3腹の死産胎子及び虚弱豚10頭について病性鑑定を実施。

〔病性鑑定〕病理学的検査：主要臓器、脳等を用いてHE染色を実施。細菌学的検査：主要臓器、脳等を用いて菌分離。ウイルス学的検査：扁桃、脳、血清等を用いてウイルス分離、日本脳炎ウイルス(JEV)・PRRSウイルス(PRRSV)・豚パルボウイルス(PPV)・ゲタウイルス・シンプ血清群ウイルス及びレプトスピラ特異遺伝子検索と抗体検査を実施。

〔検査成績〕病理解剖では、A農場1頭、B農場10頭に著変は認められず、病理組織所見では、A農場の死産胎子の中脳に単核系細胞による囲管性細胞浸潤、小型のグリア結節が認められた。B農場の10頭については9頭に軽度～重度の神経細胞の変性壊死、単核系細胞による囲管性細胞浸潤、小型のグリア結節が内5頭については多発性巣状壊死が観察された。細菌学的検査では、有意な菌は分離されず。ウイルス学的検査では、PRRSウイルス(PRRSV)・豚パルボウイルス(PPV)・ゲタウイルス・シンプ血清群ウイルス及びレプトスピラ特異遺伝子は検出されず。A農場死産胎子の胸水・腹水を用いた抗体検査ではJEVに対するHI抗体及び中和抗体の上昇が確認された。B農場の2腹分の脳乳剤プール材料からJEVの遺伝子断片が検出され、1頭の脳乳剤からJEVが分離された。また抗体検査ではJEVに対するHI抗体及び中和抗体の上昇が確認された。よって、この2例の症例は、豚の流行性脳炎と診断された。

〔まとめ及び考察〕

A農場では毎年2月にJEVワクチンを接種していたが今年は、接種時期が一定でなく接種漏れもあり、5月の日脳HI抗体検査では、初産豚については、10倍～1280倍とバラツキが激しく、家保が指導中であった。B農場においては、今年よりワクチン接種を中止していたとのことであった。両農家ともPRRS陽性農場であり、異常産の発生の原因はPRRSウイルスと決めこんでいた。豚の日本脳炎の感染は、豚舎内での室温が高いことから一年中蚊が生活できる環境であることが誘因とされ季節を問わず続いている。本症が経済的損失が大きな疾病であることから我々は、注意喚起の意味で管内全農家にパンフレットの配布によるワクチン接種の推進を行った。本症の予防は、生ワクチンの1回接種だけでなく不活化ワクチンを含むL-K方式の2回接種または生ワクチン2回接種を確実にを行うことが重要と考えられる。